

水稲品種「ゆめさんさ」の栽培法

中村 英明・多田 勝郎*・本田 孝子**

(岩手県立農業試験場県南分場・*岩手県立農業試験場・**岩手県立農業試験場県北分場)

Cultivation Method of Rice Variety "Yumeasansa"

Hideaki NAKAMURA, Katsuro TADA* and Takako HONDA**

(Kennan Branch, Iwate Prefectural Agricultural Experiment Station・
*Iwate Prefectural Agricultural Experiment Station・**Kenpoku Branch,
Iwate Prefectural Agricultural Experiment Station)

1 はじめに

「ゆめさんさ」は岩手県においては中生の良食味品種で、主に北上川下流地帯の作柄安定化と産米の品質・食味の向上のため1993年に奨励品種に採用された。今後、「ゆめさんさ」は作付面積の拡大が見込まれ、安定的に栽培するうえでの指標が早急に求められていた。

そこで、現地及び場内の試験結果を基に、安定栽培するうえでの栽培法を検討した。

2 試験方法

- (1) 試験年次及び試験場所
1991～94年 農業試験場県南分場
1992～94年 県中南部の現地圃場 (22カ所)
- (2) 供試品種 ゆめさんさ (旧系統名 岩手36号)
- (3) 移植日 県南分場：5月9～11日
現 地：5月10～17日

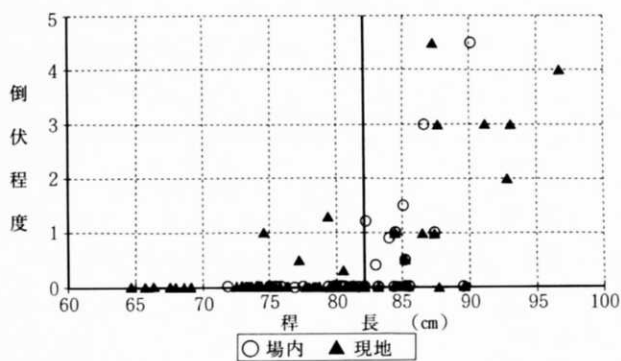


図1 稈長と倒伏程度との関係 (1991・92・94年)

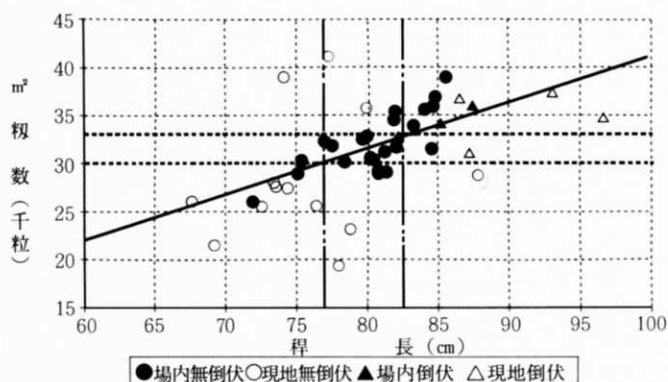


図2 稈長と m^2 穂数との関係 (1991～94年)
(標本数42 相関係数0.4433 有意水準1%)

(4) 施肥法

県南分場：基礎窒素10a当たり4, 6, 7, 8 kgに追肥の時期 (幼穂形成期, 減数分裂期, 追肥量10a当たり2 kg) を組み合わせて試験を行った。

現地：農家の慣行法で行った。

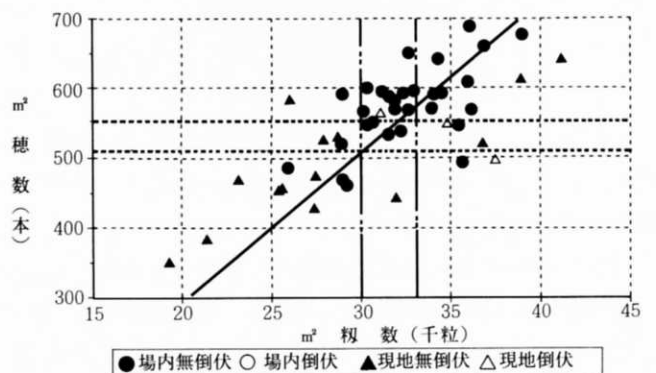


図3 m^2 穂数と m^2 穂数との関係 (1991～94年)
(標本数40 相関係数0.6910 有意水準0.1%)

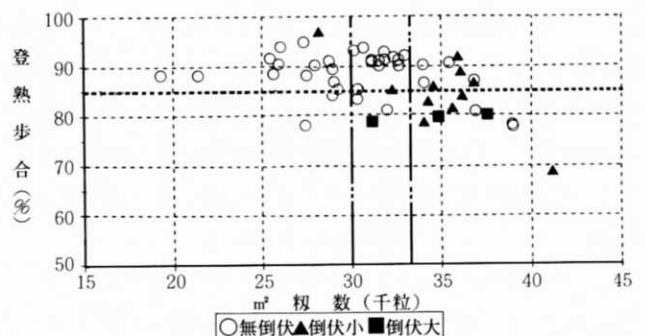


図4 m^2 穂数と登熟歩合との関係 (1991・92・94年)

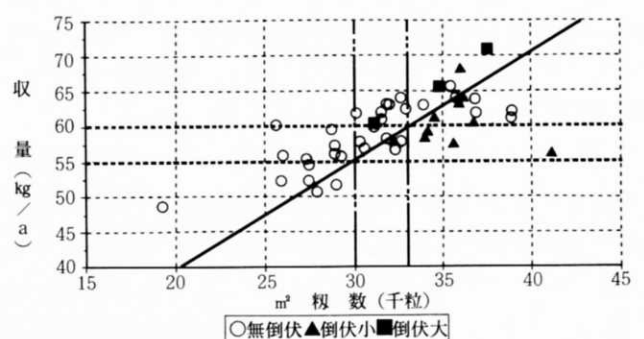


図5 m^2 穂数と収量との関係 (1991・92・94年)
(標本数100 相関係数0.5621 有意水準0.1%)

3 試験結果及び考察

(1) 収量構成要素

安定生産に重点をおき、倒伏をさせないということを重視して収量構成要素を決定した。

稈長は、倒伏の増加の傾向から82cm以下とした(図1)。

㎡当たり粒数は、倒伏をさせないために上限を33千粒とした。下限は、これ以下になると心白粒が発生しやすくなる傾向がみられる30千粒とした(図2)。なお、心白の発生する原因については、「ゆめさんさ」が発生しやすい品種であることに加え、㎡粒数の減により千粒重の増加や登熟速度がさらに上がることが考えられる(データ未掲載)。

㎡穂数は、㎡当たり粒数と穂数の関係から510~550本とした。なお、上限については現地が少ないためやや低めに設定した(図3)。この穂数を得るための最高分げつ茎数は、680~800本/㎡必要である(データ未掲載)。

登熟歩合は、「ゆめさんさ」が登熟が良好な品種であるため、倒伏しなければ85%以上(㎡粒数30~33千粒)が確保可能である(図4)。

期待㎡粒数内での収量(1.9mmの篩で調整)は、550~600 kg/10aを得ることができる(図5)。

(2) 栽培法

「ゆめさんさ」は、基肥の窒素量が少ないと初期の分げ

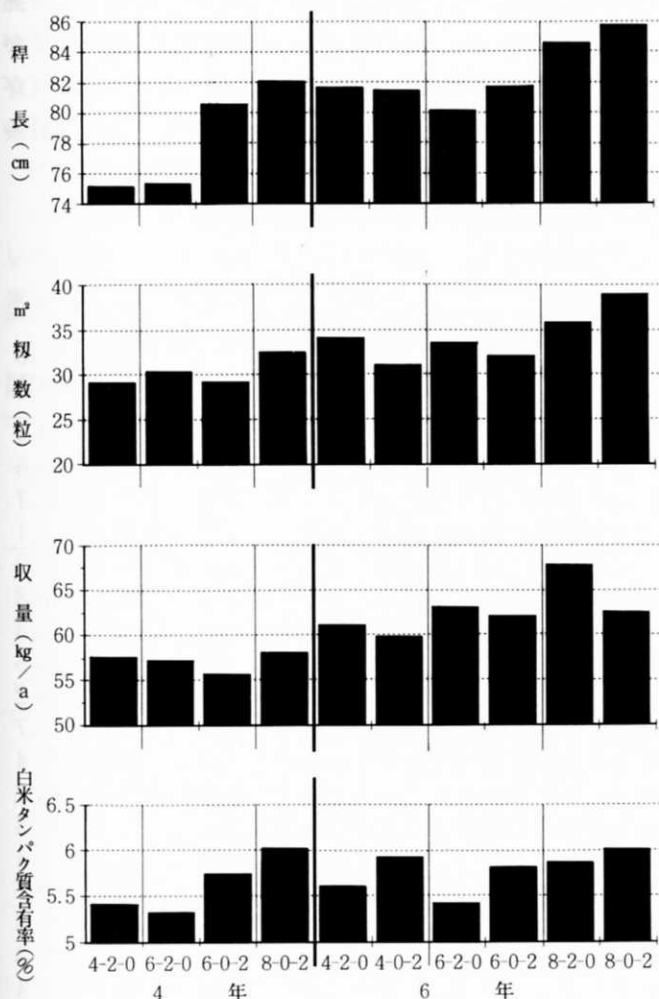


図6 施肥法と収量構成要素及び食味成分
(下段の数字は「基肥-幼穂形成期-減数分裂期」
の施肥窒素量 (kg/10a))

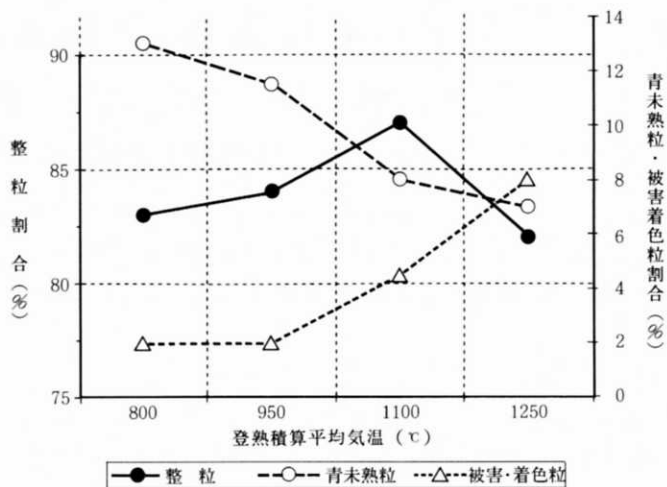


図7 登熟積算平均気温と玄米品質(1992年)

つが確保しにくく、穂数が確保できないため粒数が減る傾向にある。一方、極端な多肥は白米タンパク質を増加しやすいので、基肥窒素量は6 kg/10a(「あきたこまち」より1 kg/10a程度の増)とすることが必要であると考えられる。

追肥は、幼穂形成期に窒素成分で2 kg/10a程度とする。これは、穂数及び一穂粒数を確保するためと減数分裂期以降では白米タンパク質が増加しやすいためである(図6)。

刈取時期は、出穂後の平均積算気温900~1050℃が目安と考えられるので(図7)、実際の登熟状況を観察しながら適期に刈り取ることが重要である。

4 まとめ

以上のことより、「ゆめさんさ」の収量構成要素を表1のようにまとめ1994年の指導上の参考事項に供した。

表1 収量構成要素の指標(1.9mm篩)

稈長 (cm)	㎡穂数 (本)	一穂粒数 (粒)	㎡粒数 (千粒)	千粒重 (g)	登熟歩合 (%)
77~ 82	510~ 550	54~ 60	30~ 33	22.5	85 以上

「ゆめさんさ」は収量構成要素からもわかるように偏穂数型の品種である。そして、初期分げつが旺盛であることから、初期に分げつを確保して穂数につながる収量確保にとって重要である。そのために、基肥の増、そして幼穂形成期の追肥を栄養診断の指標に基づき行うように指導している(表2)。なお、栄養診断基準については、最高分げつ期・減数分裂期も含めさらに細かく検討中である。

表2 幼穂形成期における栄養診断指標

項 目	指 標 値
稲体乾物重(g/㎡)	400~500
稲体窒素濃度(%)	1.7~2.2
窒素吸収量(g/㎡)	7.0~8.5
カラスケール	3.9~4.6
SPAD葉緑素計	34.0~40.0